

### 「論評」：貨幣, 信用, 恐慌に関する一八五 一年の一論稿

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

46

(号 / Number)

2・3

(開始ページ / Start Page)

295

(終了ページ / End Page)

320

(発行年 / Year)

1978-10-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008373>

## カール・マルクス『論評』

— 貨幣、信用、恐慌に関する一八五一年の一論稿 —

大 谷 禎 之 介 (訳)

訳者はしがき

ここに訳出したのは、マルクスが一八五一年三月に書いたと推定される経済学上の一論稿であって、このたび MEGA 第一部第一〇巻<sup>(1)</sup>においてその原文がはじめて公開されたものである。これより先にすでにそのロシア語訳が、はじめ『コムニスト』誌<sup>(2)</sup>に、次いでロシア語版『マルクス・エンゲルス著作集』第四四巻<sup>(3)</sup>に、発表されていた。

この論稿はマルクスの「抜萃ノート」の一冊のなかに見出されるものであって、その数ページまえにはトゥックの『通貨原理の研究』からの抜き書きがある。マルクスはこの抜萃を行なうなかで思い浮かんだことを、それまでに考えてきたことと合わせてここに書きつけておこうとしたものであろう。Reflection というその表題があとから書き加えられたものであることも、この論稿のそのような性格を推測させる。そこでこの Reflection は、「論評」と訳すことにした。

MEGAはテキストの部と付属資料 (Apparat) の部との二冊から成り、テキストの部には「校訂済みテキスト [redigierter Text]」を収め、それら二冊の「成立と来歴 [Entstehung und Überlieferung]」、「異文目録 [Variantenverzeichnis]」、「訂正目録 [Korrekturverzeichnis]」、「注解 [Erläuterungen]」を付属資料の部に収めている。本訳では、まず付属資料の部から「成立と来歴」——「典拠文書についての記録 [Zeugensbeschreibung]」を含む——を訳出したのち、「校訂済みテキスト」からの訳を掲げる。「異文目録」に記載されている手稿中のさまざまな異文、「訂正目録」に記載されているテキスト校訂箇所、それにMEGA編集者の「注解」は、すべてテキストの訳文へのパラグラフごとに挿入する注のかたちに組み変えて示すことにする。そのさい、日本語に移しようがない異文があるなど、MEGA付属資料をそっくり訳出することは不可能なので、日本の読者に理解しうるよう適宜変更を加えてある。「異文目録」および「訂正目録」はMEGAではさまざまな記号を利用して記載されているが、本訳ではすべて言葉による説明に変えてある。また訳者の注記もこのなかに加えることにする。これらの注はすべてパラグラフごとの通し番号で示し、注の部分では注番号のすぐ下に、「異文」、「訂正」、「注解」、「訳注」と記して、それぞれの注の性格を示す。またテキスト中の注番号は——通例とは異なり——つねに関係箇所の始まるところにつけられている。

原文はドイツ語であるが、かなり多くの英語の単語と若干のフランス語の単語および句とを含んでいる。これは、とくに示したほうがいいと思われる若干の場合を除いて、いちいち記すことをしていない。原語の紹介を含めて、訳者の挿入はすべて「」で示す。傍点はすべて、手稿では一本の下線で強調されているものである。

テキスト中に「88」のように挿入されているのは、マルクスの手稿(ここでは「抜萃ノート」第七冊)のページである。各ページの終わりは一で示される。そこで、ページの変わり目がパラグラフの途中にくる場合には二四九の

ように記されることになる。またMEGAの該当ページを、上部欄外に(503)のように記しておく。この二つのページの切れ目は、どちらも、新しいページの最初の単語の直前におくことを原則とした。

この『論評』の内容と意義については、「成立と来歴」のなかでも述べられており、<sup>(50)</sup>ここで特別に解説することはない。ただ、マルクスの経済学研究の発展を見るうえで、またとくに、いわゆる「通貨論争」に関連する諸問題——貨幣、信用、恐慌——についての、『経済学批判要綱』以前のマルクスの見解を知るうえで、したがってまたあえて言えば、これらの問題についての、続く五〇年代—六〇年代前半における彼の研究の巨大な前進を知るうえで、この『論評』がきわめて重要な位置を占めることは明らかであろう。

なお、本訳の発表は、日本におけるMEGAの翻訳権をもつ大月書店の了解を得て行なわれるものである。

(1) Karl Marx, Friedrich Engels: Gesamtausgabe. Hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPSU und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED. Abt. 1. Bd. 10: Karl Marx, Friedrich Engels, Werke, Artikel, Entwürfe von Juli 1849 bis Juni 1851. Berlin 1977. 以下「MEGA」の意で、この新MEGAの意で示す。

(2) Из рукописного наследия классиков научного коммунизма. Карл Маркс—Размышления, Коммунист, No 1, 1977, стр. 3-10. このロシア語訳には、ソ連のマルクスレーニン主義研究所署名のレーニン語の解題がつけられており、その末尾に、この公表を準備したのがB・C・ウイロッキーであることが示されている。本文には、この注の注がつけられていない。

(3) 《Карл Маркс, Размышления》, К. Маркс и Ф. Энгельс, Сочинения, т. 44, Москва, 1977, стр. 141-149. この訳は『コミニスト』での訳文に二〇数箇所、手を入れたものである。注解は一〇個であるが、一つを除いて、内容的には前訳とほとんど変わっていない。この二つのロシア語訳については、本訳の注のなかでいくつかあるが、訳文についてはコメントがない。

- (4) 以下、「手稿」というのはマルクスの自筆の原稿をいう。MEGAでは、付属資料の部の二〇三九ページに「抜萃ノート」第七冊の四八ページ、つまりこの『論評』の最初の部分を含むページの縮小復写が掲載されている。本訳にあたって、手稿のその他のページのコピーを見ることはできなかった。
- (5) ただし、MEWはKarl Marx, Friedrich Engels: Werke. Hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin.を表す。
- (6) ただし、そのなかで「通貨論争」にふれている部分が理論的に適切なものであるとは言いがたいことを、MEGAのためにも残念に思う。

〔MEGA付属資料の部から〕

## カール・マルクス『論評』

(一八五一年三月)

### 成立と来歴

一八五〇年九月から一八五三年八月にかけての時期のものとして、マルクス自身がIからXXIVまでの番号をつけた二四冊のノートが残されており、それらは主として経済学の諸問題のための抜萃を含んでいる。(これらのノートは——何巻かに分けて——MEGAの第四部の一部として刊行される。そのうちの小部分は、すでにかなり以前に、カール・マルクス『経済学批判要綱(草案) 一八五七—一八五八年』(モスクワ、一九四一年)への付録中の七六五—八三九ページ(一九五三年のディーツ版も同じページ)として、活字になっている。)

本草稿『論評』は、これらの経済学抜萃ノートの第七冊に含まれているが、この第七冊は、マルクスが一八五一

年の二月末ないし三月初めに書きはじめ、その大部分はこの三月中に書いたものである。一八五一年の三月末か四月初めごろ、マルクスは同時にノート第八冊を書きはじめたが、四月中、経済学の抜萃を進めることを約一か月中断し、一八五一年五月にノート第七冊および第八冊を書き終えた。このことから見ると、草稿『論評』が一八五一年三月に成立したものであることはほとんど確実である。この草稿は、マルクスが一時期ちよつと抱いた考え、すなわち、自分の経済学研究の主要な部分を終えたので、こんどは抜き書きの作業から問題点を独自に定式化することに移っていきける、という考えと密接に関連している（一八五一年四月二日付、エンゲルスあてのマルクスの手紙〔MEW、第二七巻、二二八ページ〕を見よ）。

本巻の時期（一八四九年七月—一八五一年六月）に属する浩辭な経済学抜萃ノートのなかからMEGAの第一部に収められるのはこの『論評』だけであるが、それは、マルクスがここでは抜き書きの作業からはっきりと離れて、自分の考察したところを定式化しているからである。

同じノート第七冊の、この草稿の数ページまえには、トマス・トゥック『通貨原理の研究』（ロンドン、一八四四年）からの短い抜萃がある。この書の第七章は、「商人と商人とのあいだの流通と、商人と消費者とのあいだの流通との區別」、となっている。トゥックのこの考えならびにそれと関連するアダム・スミスの考えがマルクスに『論評』を書こうと思いたたせるのに一役買ったのは確かであるが、しかし彼はすでに、トゥックからの抜き書きの作業のさいに、最初にこの問題提起をしたのはトゥックではないと述べていたし、またとりわけマルクスは、彼の『論評』での問題提起において、トゥックとスミスとはるかに越えたのである。

この草稿が成立した時期には、マルクスは一方の通貨原理の擁護者と他方の銀行理論の擁護者とのあいだの論争に強い興味をもっており、そのことは一八五〇—一八五一年の彼の抜萃のうちの多数のものに示されている。マル

クスはここに、彼自身の貨幣理論を構想するための多くの刺激を見いだした。

通貨原理は、デイヴィッド・ヒュームによって創始されデイヴィッド・リカードウによって完成された貨幣数量説——物価は商品の価値ばかりでなく流通する貨幣の数量によって左右されるという学説——にもとづいていた。この学説は流通手段としての貨幣の流通と信用貨幣の流通とを区別せず、したがって銀行信用を金価格に依存するものと考えるので、それは実践においてたびたびほかならぬ、貨幣および信用に対する需要が最大である恐慌開始期に、イングランド銀行が人為的に信用を制限する、という結果をもたらすことになった。もちろんそれは恐慌を激化させる作用をした。ピール銀行立法の形態で通貨原理は一八四四年から一八五七年にかけて、イギリスの貨幣政策および信用政策の基礎をなしていたのである。

マルクスはとくに、ジョン・フラートンやトマス・トゥックのような銀行理論の擁護者たちの著書を高く評価した。彼らは流通貨幣（銀行券）と信用貨幣とを正しく区別したが、他方では誤ったしかたで貨幣と資本とを同一視していた。

この草稿で論じられているテーマに、マルクスは彼の『剰余価値学説史』の第四章第九節（収入と資本との交換）ならびに『資本論』の第二巻第二〇章第一二節で立ち返ったが、ここでも彼は、スミスおよびトゥックからの引用を使った。彼はのちに、貸付可能資本の量ないし利子率と恐慌循環との関連を、一八四七年恐慌を例にとって、『資本論』第三巻第三〇章で詳細に論じたが、ここでも彼は、一八四七年以前の鉄道建設投機の役割に立ち返った。

草稿『論評』は、『MEGA』本巻で初めて公表されるものである。

自筆で書きおろされた原手稿。——社会史国際研究所、マルクス・エンゲルス遺稿、整理番号B四四。——このノートは、八二ページのもので、サイズは幅一九五ミリ、高さ二〇五ミリである。綴じ糸はもうついていない。紙はやや黄ばんでいるが、白紙であって、保存状態は良好、透かしはない。マルクスは黒インクで、きわめて小さい字をぎっしりと詰めて書いており、きわめてわずかの訂正がなされているだけである。「論評」は、ノート第七冊の四八ページ中央から五二ページ中央にかけてのところにある。四八、五〇、五二の各ページには、I S G〔社会史国際研究所〕の印が押されている。ノートの各ページには、誰によるものか不明だが、「G M」というしるしがつけられている。

表題はマルクスがあとから書き加えたものであるが、あるいはまた *Reflectionen* とも読めるかもしれない。校訂済みテキスト〔M E G A 本文〕は、右の自筆書きおろし稿に従っている。

〔M E G A テキストの部から〕

一八一 論 評

一方は商人たちと商人たちとのあいだの取引、他方は商人たちと消費者たちとのあいだの取引、前者は資本の移転、後者は所得と資本との交換、前者は彼自身の貨幣（貨幣）をもって行なわれる取引、後者は彼の铸貨（铸貨）をもって行なわれる取引、——A・スミス（スミス）によってなされたこの区別は重要であり、トウック（トウック）によって、またそれ以前にすでに地金委員会報告において、強調されている。しかしながら、欠けているのは、取引ならびに貨幣のこの二種類のもの（二種類）のあいだの、以下に述べるような関連である。

- (1) 「注解」商人たち [dealers] という概念は、マルクスがアダム・スミスから受け継いだものであって、スミス(の「諸国民の富」)のフランス語版編集者であるジュールマン・ガルニエの説明では、スミスがここで dealers と言っているのは、商人、製造業者、手工業者などのすべて、一言で言えば、一国の商業および工業の当事者のすべてのことである」(MEGA、第二部第三卷第二分冊、四一六ページ)「剰余価値学説史」、MEW、第二六卷第一分冊、九六ページ)。
- (2) 「注解」アダム・スミス「諸国民の富の性質および原因の研究」。マルクスはすでに一八四四年の春、パリでこの著作の或るフランス語版から抜萃をしていた。この「論評」を執筆した直後の一八五一年三月—四月に、彼はあらためてスミスの主著から、しかも英語版(第一—四巻、ロンドン、一八三五—一八三九年)によって、抜萃をした。本文のこの個所でマルクスが考えているスミスの論述は、「諸国民の富」第二篇第二章にある。
- (3) 「注解」トマス・トウック「通貨原理の研究。通貨と物価との関連、銀行券発行の銀行業務からの分離の得失」、第二版、ロンドン、一八四四年、三四—三六ページ(日本評論社「世界古典文庫」版、玉野井芳郎訳、七六—七八ページ、勁草出版サービスセンター版、渡部善彦訳、四七—五一ページ)。
- (4) 「注解」地金委員会は、金地金と銀行券との関係に関連してイングランド銀行の政策を研究するために、一八一〇年に設置されたものである。マルクスはノート第七冊でこの委員会の活動についての報告書(「金地金の高い価格の原因を調査するために任命された特別委員会の報告書。付、証言記録および統計。一八一〇年六月八日、下院により印刷を命じらる」、ロンドン、一八一〇年)、ならびに、この出版にひき続いて行なわれた討論の一部分(チャールズ・ボウズンキート「地金委員会報告書に対する実際の観察」、ロンドン、一八一〇年、デイヴィッド・リカードウ「地金の高い価格は銀行券の減価の証拠」、第四版、ロンドン、一八一一年、同「ボウズンキート氏の「地金委員会報告書に対する実際の観察」への回答」、ロンドン、一八一一年)を抜萃した。

(1)<sup>1</sup> すべての恐慌が実際に示しているのは、商人たちと商人たちとのあいだの取引は、この取引に対して商人たちと消費者たちとのあいだの取引が設ける限界をたえず乗り越える、ということである。経済学者たちが過剰生産の——すくなくとも全般的な過剰生産の——不可能性を証明する命題はすべて、<sup>(2)</sup> <sup>(3)</sup> <sup>(4)</sup> シスモンディがマカラクに反対し

すでに正しく示したように、商人たちと商人たちとのあいだの取引に<sup>(5)</sup>関連するにすぎない。このことは、次のことを一考すれば、なおいっそうはっきりする。すなわち、商人たちと消費者たちとの交換はすくなくともその $\frac{1}{2}$ までが労働者たちと小売商人たち<sup>(6)</sup>および職人たちとのあいだの交換であること、だがこの交換はこれまた労働者たちと産業資本家たちとのあいだの交換にかかっており、この後者の交換がこれはまたこれで商人と商人とのあいだの交換によって制約されている——つまり悪循環——ということである。

(1) 「訳注」原文では、ここで改行していない。読みやすくするために、ロシア語訳と同じく、改行しておく。

(2) 「異文」ここに、「けつして局限されていない」と書いたのち、消している。

(3) 「異文」「不」——あとから書き加えられている。

(4) 「注解」J「ジャン」—C「シャルル」—L「レオナール」・シモンド・ド・シスモンディ「新経済学原理、または人口との関係より見た富について」、第三版、第一、二巻、パリ、一八二七年。マルクスは一八四四年から一八四七年までのあいだに、この著作から抜萃をした。けれどもそれにあたるノートは保存されていない。

(5) 「訂正」「関連する [beziehen]」——手稿<sup>(2)</sup>は *bezieht* となっている。「語形変化の誤りである」。

(6) 「異文」「小売」——あとから書き加えられている。

(7) 「異文」はじめ、「および職人たち [Professionisten]」という句を入れない文を書きかけたが、中断してこの句を入れて文を書き離れた。

(2) 商人たちと商人たちとのあいだの交換は、もちろん、A・スミスの言うように、商人たちと消費者たちとのあいだの交換によって必然的に制限されている。というのは、後者の交換（における商品）の販売価格が最終価格であって、これらの最終価格がこれまた逆行的に、先行の取引で費やされた生産費を利潤を加えて清算しなければならぬからである。しかしながら<sup>(2)</sup>全経済学は、A・スミスのこの命題にもとづきながら<sup>(3)</sup>、ブルドン等々によって愚かなしかたで単純化されてしまっている。事柄はそんなに単純なものではない。まず第一に<sup>(4)</sup>、イングランドにお

(504)

ける商人たちと商人たちとのあいだの取引を制限しているのは、イングランドにおける商人たちと消費者たちとの取引(だけ)では毛頭なく、多かれ少なかれ、全世界市場での商人たちと消費者たちとのあいだの取引である。たとえば、インドの商会または東インドの商人がインディゴをロンドン市場に送付する。ロンドン市場でインディゴの競り売りが行なわれる。これは商人たちと商人たちとのあいだの取引である。インディゴの買い手は、一部をフランスに、ドイツに、等々に売るが、これらのところでインディゴを買うのは、それぞれの国の商人たちと工場主たちである。彼らが最終的にインディゴの価格を引き出すかどうかは、消費者への最終製品の販売にかかっており、しかもこの消費者はもしかするとイオニア諸島の、あるいはアフガニスタンの、あるいはアドレイドの住人かもしれない。つまり、いくつかの国民の内部での商人たちと商人たちとのあいだの取引が一国民内部での商人たちと消費者たちとのあいだの取引によって限界づけられている、と言うとすれば、それは誤っているであらう。この取引が二(五)世界的なものである場合には、それは世界市場での商人たちと消費者たちとの取引によって限界づけられているのであり、しかも、商人たちと商人たちとのあいだの取引そのものが大規模に行なわれれば行なわれるほど、またその国民が世界市場で卓越した地位を占めれば占めるほど、そうなるのである。第二に、労働者階級が消費者の最大部分をなすので、次のように言われるかもしれない。労働者階級の所得が、ブルドンの考えるのとは違つて一国においてではなく、世界市場で減少するのに応じて、それだけでもすでに生産と消費との不比例が、したがつて過剰生産が引き起こされる、と。このことは、だいたいのところ正しい。しかしそれは、有産階級の奢侈の増大によつて修正されるのである。またこの命題を絶対的なものとして立てるならば、それはあたかも、大農園主の取引が彼の黒人の消費によつて規定されていると言おうとするように、誤りであらう。第三に、商人たちと商人たちとのあいだの取引は、その大部分が、商人たちと消費者たちとのあいだの取引を生産する。たとえば、工場主た

ちが投機者から非常に大きな注文を受けて労働者たちを大いに雇うときには、労賃は上昇し、労働者たちの消費は増加する。鉄道建設投機のさいには非常に大きな最終消費が生みだされるが、この消費についてはけっきょく、それがまったく「不生産的」なものであったことが明らかとなる。われわれはまた実際に、商人たちと消費者たちとのあいだの取引は、ほとんどの場合、けっきょく商人たちと商人たちとのあいだの取引のところのために、というところを見いだすのである。恐慌はつねに、まず最初に前者の取引において始まる、——ときにはもちろん、制限されている消費諸力が見誤られていただけでも始まるが、ときにはしかし、供給がそれまで言われていた見積りを越えて増大するとき（たとえば穀物投機の場合）にだけ始まるのである。第四に、過剰生産は、ただ不均衡な生産にのみ帰せられるべきではなく、資本家たちの階級と労働者たちの階級とのあいだの關係に帰せられるべきである。

- (1) 〔訳注〕原文では、ここで改行していない。読みやすくするために、ロシア語訳と同じく、改行しておく。
- (2) 〔異文〕ここに、「……についての全学説 (die ganze Lehre von der)」と書いたのち、消している。
- (3) 〔注解〕ブルドン、彼の著作『経済的矛盾の体系、または貧困の哲学』(パリ、一八四六年)のなかのいくつかの個所で、スマスに対して浅薄な論難を加えたが、そのくせ事実上は、スマスの主要な発見を俗流化したかたちで取り入れたのであって、マルクスはその次第を『哲学の貧困』(パリおよびブリュッセル、一八四七年)で指摘した。
- (4) 〔訳注〕「まず第一に」[d'abord]——これは後出の「第二に」等々に対応するものであろう。見やすくするために、原文にはない傍点をつけておく。
- (5) 〔異文〕「とのあいだの取引」——あとから書き加えられている。
- (6) 〔注解〕イギリスの東インド会社は一六〇〇年に設立され、一六二四年以降はこの地域のイギリス植民地(インド、ベンガル)における政治的支配権力としても機能した。くわえてこの会社は長いあいだ、インド、中国、その他のアジア諸国と

の貿易独占をほしにまににした。インドでの一八五七—一八五九年の民族解放の蜂起〔セポイの反乱〕ののちには、東インド会社はもはやイギリスの植民政策の道具としては役に立たないものとなっており、一八五八年に解散させられた。

(7) 「異文」はじめ、「または東インドの商人が」という句を入れない文を書きかけたが、中断してこの句を入れて文を書き継いだ。

(8) 「訳注」〔インディオ〕——原文は *sic* であって、文法的には「インディオ」に代わることはできないが、内容的にはそう解するはかはないであろう。

(9) 「異文」ここに、「これを」と書いたのち、消している。

(10) 「異文」ここに、「新〔*Neu*〕」と書いたのち、消している。「アドレイド〔*Adelaida*〕」は南オーストラリアの首都のアドレイド（一八三六年創設）のことであらう。

(11) 「異文」ここに、*wenn* と書いたのち、消している。

(12) 「訂正」〔鉄道建設投機のおごりは〔*bei Eisenbahnsppekulationen*〕——手稿では *bei* が *beim* となっている。〔冠詞の語形の誤り。はじめ *beim Eisenbahn* と書きかけたのかもしれない。〕

(13) 「異文」〔最終〕——あとから書き加えられている。

(14) 「訳注」〔前者〔*der erste*〕〕——「前者」とは「商人たちと消費者たちとのあいだの取引」であるが、前後関係から見れば「後者」〔すなわち「商人たちと商人たちとのあいだの取引」〕とあるべきところではないだろうか？ また、マルクスがのちに記した次の二つの文が想起される。——「恐慌が目に見えるようになるのは、消費的需要すなわち個人的消費のための需要の直接の減少においてはなく、資本と資本との交換の減退、資本の再生産過程の縮小においてである」〔「資本論」

第二部、MEW、第二四卷、八一—ページ〕。「それだからこそ、恐慌がまず出現し爆発するのは、直接的消費に関係する小売業ではなく、卸売業の部面およびこれに社会の貨幣資本を用だてる銀行業の部面だ、という恐慌現象が生じる」〔「資本論」第三部、MEW、第二五卷、三一六—ページ〕。

(3) さて、貨幣<sup>(1)</sup>について言えば、それは取引のこの二つの別種<sup>(2)</sup>の形態のなかに、本来<sup>(3)</sup>の商業における通貨、およ

び、所得と諸商品すなわち資本諸部分との交換における通貨として、見いだされるのであるが、この兩者間の分離(4)を確認するのでは十分でないのであって、それらの関連および交互作用もまた問題なのである。私人たちの、つまり消費者の貨幣が、すなわち第一にいつさいの政治的でイデオロギー的な身分の、第二に地代生活者たちの、第三(5)にいわゆる資本家たち(産業的でないそれ)の、国家の債権者たち、等々の貨幣が、労働者たちの貨幣でさえもが(貯蓄銀行において)、——要するに、人口のなかの商業に従事しない諸階級の所得のうち、彼らの日々の支出を越える超過分、また貨幣のうち、彼ら自身が、いつでも自由に使えることが必要だと考え、したがって準備金として手元に留保する(貯える)部分、を越える超過分が、——この超過分が、預金の主要源泉をなし、またこの預金がまたこれ(7)で、商業、貨幣の主要基礎をなしている。「資本の」移転、信用操作、要するにこの商業世界の内部における貨幣運動全体が、その大部分が商業を営んでいない人口の預金にもとづいてるのである。信用不安の……(9)にはこれらの預金は商業から取り去られる。生産をつかさどっている諸階級の手中において、資本を自由に使用する手段がなくされているために、資本は不生産的にされる。他方では、これらの階級は彼ら相互間の取引のために貨幣を必要とし、銀行家はもはや食料品商に、また工場主に、貨幣を貸さないで、所得が減少するとともに消費者自身(10)の手中にある通貨も減少し、こうして貨幣欠乏についての嘆きが、商業世界から消費者たちの世界のなかにはいり込んでくるのである。

(1) 【訂正】「wie、貨幣について言えば (was nun das Geld angeht)」——最後の語 *angeht* は手稿では *geht* となっている。

(2) 【異文】「ここに」、「形態」と書きかけて (Fo)、消してある。

(3) 【異文】「ここに」、「本質的」(wirklich)と書じたのも、消している。

- (4) 「異文」 ここになにかを書いたのち消しているが、判読できない。
- (5) 「異文」 「いわゆる」——あとから書き加えられている。
- (6) 「異文」 「に」に「架空」(Angier)と書いたのち、消している。
- (7) 「訂正」 「商業貨幣 (Handelsgeld)」——手稿では Handelgeld となっている。
- (8) 「異文」 「その大部分が」——あとから書き加えられている。
- (9) 「訳注」 ここになにかが書いてあるが、編集者は判読不能としている。文脈から見れば、「時期 (Zeiten)」とでもあるべきところであろう。
- (10) 「異文」 「この文の原文は次のとおり。——Das Capital wird unproduktiv gemacht, indem die Mittel über die Verfügung desselben sich innerhalb der hands der der Produktion vorstehenden Klassen vernichtet finden.」 indem 〇次に、ihm と書き、続けて判読不能の部分を書いたのち、その両方を消している。そのさい、indem という語も消してしまひに消されたのかどうかをはっきりと判読することができない。また、der (この der が右の文中の三つの der のうちどれをさすのかは不明) および vernichtet finden の各語はいずれも一義的に判読することができない。

(4) 恐慌の時期には、信用の欠乏がすべてであつて通貨は無だ、と言うのは誤りである。上述した理由から自明なことであるが、そのような時期には、一方では通貨の速度が落ちるために、また第二に、それまでは現金が必要でなかつた非常に多くの取引で現金が必要とされるために、まさにそのために通貨はその量について見れば最大である。だがまさにそのために、貨幣の量と、比較的少額の通貨だけで処理されてしまう諸取引の価値とのあいだの大きな差が生じるのである。つまり、実際に不足しているのは通貨であつて、資本ではない。資本は減価させられ、価値実現不可能である。だが、ここで価値実現不可能というのはどういう意味であろうか？ 資本は通貨に転換不可能であり、しかも資本の価値はまさにこの交換可能性のうちにある。しかしそれにもかかわらず、資本は現存しているのである。事の本質は手形が、しかも真正の (bona fide) 取引にもとづいて手形でさえも割引されない、

ということのうちにとりわけはつきりと現われる。しかも、手形は商業貨幣であり、その価値は商業資本を代表しているのである。銀行券の金への転換可能性は最少であり、銀行券の不足は商業恐慌を激化させるばかりである。真の困難は諸商品が、すなわち現実資本が、金および銀行券に転換できないということである。このことのために、一七九三年および一八二五年および一八四七年の諸現象（が生じたのであって）、これらのさいには、現実資本が存在していたところでは、大蔵省証券および銀行券の発行によって助けを受けることができた。（ただし）これらの証券や銀行券が資本であった、と主張することができないのは同様である。それらはたんに通貨にすぎなかった。恐慌はやまなかつたが、貨幣恐慌はやんだ。それゆえ銀行券の転換可能性は、銀行業においてのみならず、また商業においても、その背景に有価証券の転換可能性をもっているのである。しかし、政府証券や短期手形のような、その本性からして転換可能だと一般に認められている証券でさえも、転換可能であることをやめる。この場合、外見上は商品はまったく問題にならない。しかし、商品を代表する価値章標の転換可能性が問題なのである。商品は貨幣であることをやめるのであり、貨幣に転換することができない。この欠陥はもちろん貨幣制度のせいに、この制度の特殊の一形態のせいにされる。貨幣は貨幣制度にもとづいているが、それは貨幣制度が今日の生産様式にもとづいているのと同様である。しかし、二五〇銀行券の金への転換可能性がけっきょくのところ必要である理由は、諸商品の貨幣への転換可能性が必要だということ、すなわち、諸商品は交換価値——これは必然的に一つの特殊的存在をもち、諸商品とは区別されている——をもつということ、すなわち、そもそも私的交換の制度が行なわれるということである。貨幣の減価と諸商品の減価とは、実際には反比例の関係にさえある。しかし、銀行券が金に対して減価しうるのは、ただ、諸商品が銀行券に対して減価しうるからでしかない。そもそも銀行券の減価とはどう

(506)

(11)

(13)

(12)

(8)

(5)

いうことであろうか？それが意味するのは、諸商品は、すなわちそれらの価値は、どんな瞬間にも金銀に転化されることができなければならず、また諸商品<sup>(15)</sup>と金とのあいだのどんな中間環も、言い換えればどんな代理者も、あくまでも代理者でしかなく、だからまたあくまでも無価値<sup>(16)</sup>のものである、ということである。つまり、主要問題はつねに、どこまでも諸商品の、資本そのものの転換不可能性なのである。不足しているのは貨幣ではなくて資本だ、通貨はどうでもよいことだ、というのが、一方の人々の言うたわごとである。たわごと、というのは、ここで問題になっているのは、まさに、資本すなわち諸商品と貨幣との区別だからであり、問題になっているのは、前者は必ずしも自己の代理者としての、自己の価格としての後者を商業世界のなかにつれてくるわけではないということ、前者が、貨幣であることを、流通することを、価値であることをやめるということだからである。また、資本が副次的なこととして現われるところで貨幣を副次的なこととして描くのは、笑うべきことである。他方で、もう一方の側については、そのナンセンスぶりはもっとひどいものである。彼らは資本の転換不可能性を認めておきながら、しかも銀行券の転換可能性を嘲笑する。だが彼らは、貨幣制度にあれこれの細工や修正をほどこすことによって、これを廃棄しようと欲する。それはまるで、どんな任意の貨幣制度の定在にもすでに資本の転換不可能性が含まれているのではないかのようであり、それどころかまるで、資本の姿での生産物の定在にすでにそれが含まれているのではないかのようである。このような基礎のうえでこのことを変更しようと欲するのは、貨幣から、貨幣であるという諸属性を奪うことであるが、だからといって、資本に、つねに交換可能であり続け、しかもその適正<sup>フェアプライス</sup>価格を維持し続ける、という属性を与えることになるわけでもない。貨幣制度の定在には、この分離の可能性だけではなく、すでにその現実性が与えられており、また、それがあるということは、資本の価値実現不可能性が——資本が貨幣にもとづいているがゆえにこそ——すでに資本とともに、したがって全生産組織とともに与えられている、と

(507)

いうことを証明するのである。しかし、ただ信用思惑だけが貨幣市場へのこの圧迫をもたらしたのだ、と言うことは、同様に誤りである。貨幣それ自体が、これはまたこれで信用制度の条件となる。あるいは、同じ原因が両者をつくりだすのである。貨幣の不都合なところを多くの貨幣を作ることによって、あるいは貨幣の本位を減価させることによつて廃棄しようと欲する<sup>(17)</sup>パーミングムの連中は、もちろん愚か者である。またブルドン、グレー、等々も愚か者であつて、彼らは貨幣を保持しようと欲するのであるが、ただし貨幣に貨幣の諸屬性をもたせないようにしてそうしようというのである。全恐慌が爆發するのは、つまりブルジョアの生産の総回帰がもろもろの症状——もちろんこれらの症状は、偶然的には、これまた「恐慌の」原因となる——として「現われる」のは、貨幣市場においてであるので、どこまでもブルジョア的地盤に立つ偏狭な改革者が貨幣を改革しようと欲することほどわかりやすいことはない。彼らは、価値と私的交換とを保持することによつて、生産物とその交換可能性との分離を保持する。だが彼らは、この分離のしるし、「すなわち貨幣」を、それが同一性を表現しているように取り決めて、おこらうと欲するのである。

- (1) 「訳注」原文では、ここで改行していない。読みやすくするために、ロシア語版と同じく、改行しておく。
- (2) 「異文」ここに、「すでに」と書きかけて (sch.) 消してある。
- (3) 「訂正」現金が必要でなかった [es...nicht erfordert war] —— 手稿では、es...war が sie...waren となっている。
- (4) 「訳注」「価値実現不可能 [unverwerthbar] —— verwerten という語が「価値増殖する」と訳しうるような意味で多く使われるようになるのはかなり後年のことである。この語ははじめは、「利用する」、「価値を得ることに利用する」、「転換して価値にする」など、この語の原義に近い意味で使われた。「経済学批判要綱」でも、「価値実現する」の意味の場合がかなり多い。ここでも「減価する [entwerthen]」に対して、価値として生かす、価値としてはたらかず、という意味で verwerten が用いられているものと考えられる。

(5) 「異文」ここに、「販売……」と書きかけて (Verkaufs)、消してある。

(6) 「訳注」「転換可能性 [convertibility]」——銀行券の金への転換可能性とは銀行券の兌換性にはかならない。したがって「銀行券の convertibility」は「銀行券の兌換性」と訳すべきところであるが、ここでは、商品、資本、手形、等の convertibility と対比されているので、すべて「転換可能性」としておく。

(7) 「注解」マルクスが考えていたのは、イギリスの一七九三年、一八二五年、一八四七年の経済恐慌のことである。

(8) 「異文」この一文は、あとから書き加えられている。

(9) 「異文」ここに、「もちろん」と書き、続けて判断不能の部分を書いたのち、消している。

(10) 「異文」ここに、「商業」と書いたのち、消している。

(11) 「異文」「証券」——はじめ「銀行券」と書いたが、あとでそれを消して、「証券」と書き加えた。

(12) 「異文」「外見上は」——あとから書き加えられている。

(13) 「異文」「価値」——あとから書き加えられている。

(14) 「訳注」この部分の原文は次のとおりである。——「Tauschwerth... der nothwendig eine besondre Existenz hat, der von der Waren unterschieden ist. イタリアンク体にした *der* は *die* の誤りではないかと思われる (あるいは手稿ではたんに *d* となっている?)。そう読むとすれば、この部分は次のようになる。——「これは必然的に、諸商品とは区別される一つの特殊的存在をもつ」。

(15) 「異文」「諸商品」と金とのあいだのどんな中間環も、言い換えれば「——あとから書き加えられている」。

(16) 「訳注」「無価値のものである [Gratıs]」——*Gratıs* のふじうの意味(無償・無料・無報酬である)では理解できないので、意訳しておく。

(17) 「注解」「バーミンガムの連中 [Birminghamer]」という言葉でマルクスが考えていたのは、バーミンガムの銀行家トマス・アトウッドによって創始されたいわゆるバーミンガム学派のことである。この経済学派の諸見解は、「ミッドランド・カウンティーズ・ヘラルド」紙への一連の書簡のなかで述べられ、また「通貨原理。ジェミニイ書簡集」(ロンドン、一八四四年)という書名の書物として出版された。「ジェミニイ」(双子座の意味)と自称した著者は、トマス・バーバー・ライトとジョン・ハーロウであった。スプーナと、トマス・アトウッドの弟のサイアス、この二人もまた、バーミンガム学派

の代表者であった。彼らは観念的貨幣尺度の学説を宣伝し、貨幣をたんに計算名にすぎないものとみなした。この理論に従って、彼らは、ポンド・スターリングの金純分を引き下げようという企画を提案したが、この企画は「小シリング企画」と呼ばれた（ここからまた、この派に対する「小シリング論者」という呼び名が生まれた）。パーミンガム学派の実践上の諸提案は、同じくトマス・アトウッドによって指導的に展開された、「通貨原理」の理論にもとづいていた。この理論は一種の貨幣數量説であつて、これによれば諸商品の価格は、流通している貨幣の量によって規定されるはずであつた。この理論をよりどころにしようというイギリス政府の試み（一八四四年の銀行立法）は完全に失敗した。

パーミンガム学派の諸見解と彼らによって引き起こされた当時の経済学的文献中の広範な諸論争とに、マルクスはいくたびか言及している。彼は一八五〇年一月に、「ジェミニイ書簡集」ならびに同じく「ジェミニイ」によって書かれそれよりまえに刊行された「わが国現行通貨制度の眞の性格とその確実な帰結。S・I・グレイアムによって彼の「穀物と通貨」において証明された」（パーミンガム、一八四三年）から抜萃をした（抜萃ノート第一冊を見よ）。マルクスは以下の各所で、パーミンガム学派について自分の見解を述べた。——『経済学批判要綱（草案）』、一八五七—一八五八年』第一部、モスクワ、一九三九年、六八九—六九〇ページ（一九五三年のドイツ版も同じページ）、『経済学批判』、ベルリン、一八五九年、第二章（MEW、第一三卷、六四—六六ページ）、『資本論』第一卷第三篇第八章（MEW、第三卷、二四七ページ）、『資本論』第三卷第五篇第三章（MEW、第二五卷、五五四—五五五ページ）および第三四章（同上、五七五—五七六ページ）。

(18) (訳注)「保持する [halten...bei]」——behalten...bei とあるべきところと思われる。

(5) まったく単純な民主主義者たち、すなわち愚直で無知な民主主義者たちが知っているのは、商人たちと消費者たちとのあいだの取引における貨幣<sup>(1)</sup>だけである。だから彼らは、もろもろの衝突の、嵐の、貨幣恐慌の舞台<sup>(2)</sup>となる領域や大きな貨幣取引を知らない。そこで、ものごとはこの単純な連中の目には、万事彼らの目に映ずるがままに、つまり彼ら自身がそうであるのと同様に単純かつ無邪気なものに見える。彼らがこの商人たちと消費者たちとのあいだの交換のなかに見るものは、正直者がやる価値と価値との交換であつて、この交換では、個々の個人の自由がその最高の実践的な確証を受け取るというわけである。階級対立はこの交換では問題にならない。一商人が他

の商人と、金を持つ個人が他の金を持つ個人と向かい合う。各個人は、消費取引にはいることができるためには、すなわち生きていくことができるためには、金を持たなければならない、ということがもちろん前提なのであるが、この前提は、各個人は労働しなければならない、言い換えれば自分の能力を——<sup>(3)</sup>シュティルナーの言う「二」ように——はたらかさなければならぬ、ということとともにおのずから与えられているものである。さしあたり次のこと、すなわち、カースト、種族、身分、階級、等々の区別と対立ともとづくこれまでのすべての社会秩序では、貨幣はこの秩序の本質的な成分であり、また貨幣制度はこの秩序の没落やその繁栄とそのつど（命運をともして）きたことは、一つの歴史的事実であって、誰も否定できないことである。したがって、われわれが、貨幣制度が階級対立にもとづいていることを証明する必要はないのであって、この単純な連中のほうが、貨幣制度はこれまでのすべての歴史的経験にもかかわらず階級対立なしにも一つの意味をもつということ、これまでのすべての社会秩序のこの一分肢（すなわち貨幣）が、これまでのすべての社会秩序を否定するような（社会）状態のなかで生き続けることができるということ、このことを証明する必要があるはずであろう。（しかし）このような課題をあのまったく単純な連中に提起するとしたら、それはまったく単純すぎることであろう。彼らは万事を二言三言で片づけるのである。ここに彼らの独特な偉大さがあるというわけである。貨幣制度および現在の全制度は、彼らの目のなかでは、彼ら自身がそうであるように雄々しくもばかげたものなのである。

（1）〔訳注〕「まったく単純な民主主義者たち」——「コムニスト」のロシア語訳ではここに次のような注解をつけている。

——「マルクスが言っているのは小ブルジョアの民主主義者のヴィリヒ、シュティルナー、その他のことである。民主主義的な『あほうども（simpletons）』について、マルクスは一八五一年六月二七日にヴァイデマイヤーにあてて次のように書いた、——「これらの幸運児たちが何のために経済学や歴史の資料で頭を悩ますことがあるか？ みんなごく簡単じゃなにか、と勇敢なヴィリヒはよく私に言ったものだ」（MEW、第二七巻〔第三版〕、五六〇ページ）。

(2) 「異文」ここに、「公然たる」と書いたのち、消している。

(3) 「注解」マックス・シュティルナー「唯一者とその所有」、ライプツィヒ、一八四五年、三五三ページ、——「汝らの能力をはたらかせよ、がんばれ、そうすれば金、汝らの金、汝らの刻印を帯びた金にこと欠きはしないであろう……」。カール・マルクスフリードリヒ・エンゲルス「ドイツ・イデオロギー」、(第一巻)第三篇一「のうちの」新約「自我」五の三(結社)の三、貨幣「MEW、第三巻、三八〇ページ」、をも見よ。

(508) だが、われわれはもう一度、彼らお好みの消費者たちと商人たちとのあいだの取引のなかにわが身を置いて考えてみよう。彼らの視野はこの取引を越えることがない、——<sup>(1)</sup>そのわきも見ないし、前方も見ないし、ふりかえりもしない。

(1) 「訳注」以下の部分の原文は次のとおりである。——*weder bei Seite, noch vor, noch rückwärts. MEGA*はここに「訂正注」を付し、「手稿で vor」となっているのを vor「に訂正」した、としている。しかし右の原文にみられるようにテキストでは vor「となっており、またそれを vor」に変えるべき理由は見あたらない。これは、「手稿で vor」となっているのを vor「に訂正」の誤りであろうか？

自由な諸個人が食料品商で買い物をするさいの手段はなにか？ 彼らの所得の等価物あるいは価値章標である。<sup>(2)(3)</sup> 労働者は労働賃銀を、工場主は利潤を、資本家は利子を、土地所有者は地代を、それぞれ金銀や銀行券に転化されているそれらを、食料品商、靴屋、肉屋、パン屋、等々で交換に出す。では、靴屋、食料品商、等々が、貨幣化された労賃、地代、利潤、利子と交換するものはなにか？ 彼の資本である。彼はこの行為のなかでそれを補填し、再生産し、拡大する。

(1) 「異文」「手段はなにか [was ist es womit?]」——「のなかの womit は was から書き変えられたものである。」

(2) 「異文」「労働賃銀 [Arbeits-Lohn]」——「賃労働 [Lohnarbeit]」から書き変えられたものである。

(3) 「訳注」前注に示したMEGA「異文注」では、右の書き変えのさいに、ここに「それと引き替えに (aufhin)」という語が加えられたことになっている。しかしMEGAテキストにはこの aufhin ははいつていない。テキストが誤って落としているのか、「異文注」の記載に誤りがあるのか、判断できない。ただ、文脈から言えばこの語がないほうがいいように思われる。

したがって、見かけはきわめて単純なこの行為のなかに、第一に、<sup>(1)</sup>いっさいの階級関係が現われ出てくるのであり、賃労働者、土地所有者、産業資本家、非産業的な資本家、という諸階級が前提されている。他方で前提されているのは、しかもなによりもまず前提されているのは、特定の社会的諸関係の存在であって、これが富に資本の性格を与え、また資本を収入から分かつのである。単純さは、貨幣化が消えてしまうのと同時に消えてしまう。

(1) 「異文」「第一に」——あとから書き加えられている。

(2) 「異文」「しかもなによりもまず前提されているのは [und vor allem]」——このなかの end は、あとから書き加えられている。この追加前のこの文の冒頭は、「他方でなによりもまず前提されているのは」となる。

そして、労働者が彼の賃銀を——土地所有者が彼の地代を、工場主が彼の利潤を、そうすると同様に——、現物支給や現物給付や物物交換ではなく、貨幣で支払われ、受け取るということ、このことが示しているのは、貨幣制度は諸階級の高度な発展を前提しており、貨幣制度の欠除、つまり前貨幣的な社会諸段階が前提するのよりも大きな、諸階級の分離分裂を前提している、ということだけである。貨幣なしに<sup>(1)</sup>賃労働はなく、それゆえ利潤と他の形態における「利潤である」利子もなく、それゆえ利潤の一部分にすぎない地代もない。

(1) 「異文」ここに、「労働」と書きかけて (Arb) 消してある。

貨幣の形態、つまり金、銀、または銀行券の形態では、もちろん、所得から次のことを見てとることはもはやで

(509)

きなくなっている。すなわち所得は、一定の階級に属するものとしての個人、つまり階級個人としての個人にのみ  
 帰属する——個人がその所得を物乞いや盗みによって手に入れ、したがってやはりこの種類の所得からくすねて、  
 「他の」ある階級個人を多少とも強力的なしかたで代表する、というのではないかぎり——、ということである。こ  
 の金化あるいは銀化は階級性格をあいまいにし、それを糊塗する。そこから、ブルジョア社会における平等——  
 「しかも」貨幣をマイナス（したの場合の）——の外観が生じる。他方では、そこから、貨幣制度が完全に発展した社  
 会では、諸個人が貨幣を——その所得源泉がどのようなものであるか——もっているかぎり、彼らの現実のブル  
 ジョアの平等が、現実が生じることになる。特権を与えられた者だけがあれこれを交換できる古代社会の場合とは  
 もはや異なり、あらゆるものがあらゆる人々に持たれうるものであり、どんな素材交換でもだれによっても、彼の所  
 得が転換されうるだけの貨幣量に依りて行なわれうるのである、——娼婦、科学、保護、勲章、召使い、たいこも  
 ち、これらすべてが、コーヒーや砂糖やにんじんのようなものと同様に、交換生産物（となる）。身分の場  
 合には、個人の享受、彼の素材変換は、彼を包摂している特定の分業に依存している。階級の場合にはそれは彼が  
 取得することのできる一般的交換手段にだけ依存している。第一の場合には、個人は社会的に制限されている主体  
 として交換に、彼の社会的な位置によって制限された交換にはいる。第二の場合には、個人は一般的交換手段の所  
 有者として交換に、すべてのものとの交換——社会はすべてのもののこの代表者と引き替えにすべてのものを与え  
 なければならぬ——にはいる。貨幣と諸商品との交換では、つまり商人たちと消費者たちとのこの取引では、工  
 場主は——食料品商のところで買物をするときには——労働者と同じく消費者であり、また召使いは主人と同じ貨  
 幣価値と引き替えに同じ諸商品を手に入れる。つまり、この交換の行為においては、貨幣に転化された所得の二重二  
 特殊な性格が脱落するのであり、またすべての階級個人があいまいになって、ここで売手に相対する買手という範

瞬のなかに消えてしまうのである。ここから、買う、売る、というこの行為のなかに、階級個人ではなくて、階級性格をもたない買う個人インディビジュアルそのものを見る幻想が生じるのである。

- (1) 「異文」 「つまり階級個人としての個人に」——あとから書き加えられている。
- (2) 「異文」 「のみ」——あとから書き加えられている。(この書き加えの時点と前注に示した書き加えの時点との先後関係は不明である。)
- (3) 「異文」 「多少とも (rather)」——あとから書き加えられている。
- (4) 「訳注」 この挿入部分の原文は、minus des Geld というものである。その意味するところは、「ただし、貨幣の量における平等でないことは明らかだから、この量は別として」というようなことであらうか？
- (5) 「異文」 「交換生産物」——あとから書き加えられている。
- (6) 「異文」 「社会的に制限されている主体」——「個人」を書き直したものである。
- (7) 「異文」 ここに、「交換すること」と書きかけて (Tausch) 消してある。

いま、さしあたり所得の独自の性格——この性格が金銀のなかに現われないのは、ローマ皇帝ハドリアヌスが言ったように、女郎屋から取り立てた税金でも尿の臭いが「臭わぬ！」<sup>(2)</sup>のと同様である——を度外視しよう。「(それでも) この性格は、自由に処分できる貨幣の量のなかにふたたび現われてくるのである。だいたいにおいて、購買の範囲は所得そのものの性格によって規定されている。<sup>(3)</sup>消費者のなかで最大の階級である労働者たちが買う対象の規模と種類は彼らの所得そのものの本性によって記述<sup>(5)</sup>されている。ただし、労働者は自分の子供たちのために肉やパンを買うかわりに自分の賃銀を火酒に飲みつぶすこともできるのであって、これは現物支払いの場合であればできないことである。それによって彼の人格的自由は拡大<sup>(6)</sup>されている、すなわち火酒を思うままにできることに以前よりも大きな余地が与えられているというわけである。他方では、労働者階級は、それが必要生活資料を越えて

余すものと引き替えに、肉やパンではなく、書物や講演者や会合を買うことができる。労働者階級は、たとえば知的諸力のような社会の一般的諸力をわがものとする、以前よりも大きな手段をもつのである。所得の種類がまだ生業の種類によって規定されているところでは、つまり今日のようにたんに一般的な交換媒介物の量によって規定されているのではなく、彼の生業そのものの質によって規定されているところでは、労働者階級が社会に対してはもちうる・またそれがわがものとなしうる・諸関連はかぎりなくより局限されたものであり、また素材変換のための社会的機関は、社会の物質的生産および精神的生産ともども、特定のしかたと特殊の内容とはじめから制限されている。それゆえ貨幣は、階級諸対立の最高の表現でありながら、同時に、宗教的、身分的、知的、個人的な諸區別をあいまいにするのである。たとえば封建諸侯 (die Feudalen) はブルジョアに対立して、こうした貨幣の一般の平等化的な力を奢侈品法によって政治的に食い止め、打ち破ろうと努力したが、むだなことであった。こうして、消費者たちと商人たちとのあいだの取引行為では、質的な階級区別は買手が意のままにする貨幣の量的区別、その大小のなかに消えてしまい、また同じ階級の内部では、この量的区別が質的区別……<sup>(11)</sup>。こうして、大ブルジョア、中ブルジョア、小ブルジョア (の区別が生じる)。—

- (1) 〔異文〕ここに、「すなわち」と書いたのち、消している。
- (2) 〔注解〕この言い回しは、ヴェスパスシアヌス皇帝が便所税からの収入について残したものである。〔ロシア語版著作集〕では、次のような注解をつけている。——「マルクスが挙げている事実は正しいけれども、ハドリアヌス皇帝は、ヴェスパスシアヌス皇帝によって公衆便所に課された税についてヴェスパスシアヌス皇帝が応答したものを繰り返したのである。」
- (3) 〔異文〕「する [st]」——はじめ、複数形の sind を書いたのち、それを消して単数形の ist を書いた。
- (4) 〔異文〕「労働者たち [die Arbeiter]」——冠詞の die は、あとから書き加えられている。
- (5) 〔訳注〕「記述されて [beschrieben]」——これは「制限されて [beschränkt]」の誤りではないかと思われる。手稿でも

Beschränkt あるいは (誤って) beschränken となっていて、これを読み誤ったのかもしれない。

- (6) 「異文」 「拡大されている、すなわち」——「拡大されている。他方」を書き変えたものである。
- (7) 「訂正」 「労働者階級 [sie]」——手稿では s となっている。
- (8) 「訳注」 「労働者階級が社会に対してはいろいろ・またそれがわがものとなりうる・諸関連」——原文は次のような破格構文である。——die Beziehungen, in die sie zur Gesellschaft treten und sie sich aneignen kann.
- (9) 「異文」 「かぎりなく」——「はるかた」を書き変えたものである。
- (10) 「訳注」 「より局限された [bornierter]」——前注に示した書き変えのさいに、「より」[:en] は取るつもりだったのでないかと思われる。
- (11) 「異文」 「……」 「判断不能部分」——「となる [wird]」を書き変えたものである。「文脈からすれば、「となる」の類義語であるように思われる。」

〔訳者追記〕 訳稿について、久留間敏造、久留間健両氏からかずかずのご教示をいただき、改善をはかることができた。記して感謝の意を表す。

(一九七八年九月二日)